

博物館天文台、15年のあゆみ

花　山　　豪

昭和27年4月　郷土博物館の開館と同時に設置された天文台も、15年を経過した。開館した当初は、ちょうど火星の接近時になつており、かつて一度も見ることのできなかつた、15cm鏡による火星像に、心をときめかしたことであつた。それ以来15年。今年もちょうど火星の接近する年であり、火星の接近周期が15年であることを考えれば、その条件は、ちょうど開館時とほとんど同じである。

このような時期にあたつて、博物館屋上の天文台のあゆみをふりかえつてみたいと思う。

〔開設当初のころ〕

昭和27年に天文台が開設された当時は、ちょうど火星が接近していた時であつた。博物館の開館を記念して招へいされた東大の藤田良雄博士の講演会のあとで、福井天体観測研究会が発足した。以後これらの研究会が中心となつて、博物館天文台は運営されるようになつた。当時は望遠鏡を操作できたのは「前博物館長の東谷薰氏ただ1人で、夜分ばかり訪ねて行き、非常にご迷惑をかけたものであつた。しかし、機会をみては近づいた火星をスケッチするために、会員のために便宜をはかつていただきたものである。この頃、市内の学校などにあつた望遠鏡といえば6cm級のものしかなかつたので、15cmの望遠鏡といえば、アマチュアの天文愛好者の利用できるものとしては最高級のものであつたといえる。このようなことから、機械は高級機でも、我々の観測技術といえば、幼稚なものであり、火星面の模様がみえた。みえないといつてにぎやかだつたものである。その後火星も遠ざかり、博覧会の会期中であつたことや、その他の事情あまり観測できなかつたようである。

昭和28年になると、写真撮影を行なうようになつた。とくにこの年の11月18日に撮影した月令10の月面は、はじめて写真らしく写つたもので、会員一同大喜こびしたものであつた。翌29年は再び火星が接近した。この年は次の大接近（1956年）を前にして、火星に生物がいる。いないといつて、新聞等でにぎやかなものであつた。研究会員も大いに張りきつて、200枚以上のスケッチをした。またこの年はじめて火星の写真を手がけた。これは付属品の月面カメラの一部を改造し、キャビネット乾板に撮影した。

昭和30年には、主に月面の撮影を行なつた。とくに夏期に集中的に撮影し、各月令とも、ほぼ満足できる写真を得ることができた。

[火星の大接近]

昭和31年は火星大接近の年であつた。前回の接近同様に、多數のスケッチをとり、とくに、南極冠の小さくなつて行くようすが観測できた。また火星面の写真も多數撮影し、接近時に発生した火星面の大黄雲もとらえることができた。この接近のときに、火星を見るための一般公開をしたところ、200名以上の観覧者があり、天文台と屋上は人でいっぱいになつた。この年の観測で、とくに貴重なものとなつたのは、先に記した大黄雲の観測である。この大黄雲は8月中旬頃に発生し、20日頃に急速に発達したもので、当天文台では23日と26日に写真撮影している。この写真は、その初期の状況をとらえている関係から、とくに貴重なものとなつた。なおこれらの観測資料は国内の火星委員会へ送付し、火星観測の資料として役立つた。

昭和32年夏には、新彗星が出現した。チエコスロバキアのムルコス氏の発見によるもので、明るさは2等級ほどになり、当天文台でも写真撮影を行なつた。なおこの時ラジオニュースで、肉眼で見えることが速報され、多くの市民の目を楽しませた。また8月14日に当天文台で撮影したこの彗星の写真は「天文と気象」誌の表紙を飾つた。昭和33年4月には伊豆諸島で、7分もつづく金環日食がみられ、福井でも太陽の約85%が食される部分日食になつた。当天文台でも研究会員が待機し、日食の始まりおよび終了時刻の精密測定や連続写真撮影を行なつた。また会員の1人は、金環日食の見える八丈島へ行き、東京や富山等の同好者と共同観測をし、金環食の連続写真を撮影した。

[ロケット技術の発達]

このような観測を続いている間に、人類の歴史が大きく変わることになつた。すなわち昭和32年10月4日にソ連が人類初めての人工衛星を打ち上げ、軌道にのつた。その後11月3日にはライカ犬を乗せた人工衛星が打ち上げられた。引き続きアメリカも人工衛星を打ち上げ、その後につづく宇宙時代へはいつた。このようなロケットによつて、天文学上にも多大な進展がみられた。その第1番目のものは、人類がはじめて、月の裏側をみることができたということである。昭和34年秋にソ連の月ロケットは、月の裏側をまわる軌道を飛び、写真を地上へ電送してきた。これによつて、今までいろいろ推測されてきた月の裏側も、表側同様に多數の火口と呼ばれるクレーターや山脈および海と呼ばれている部分が確認された。昭和36年になると、人間の宇宙飛行が成功した。この年4月12日ソ連はボストーク衛星を打ち上げ、これにガガーリン少佐が乗つて108分で地球を1周し、無事地上に降下した。昭和39年7月31日には、アメリカのレンジャー7号が月面へ衝突するまでに4,316枚の写真を撮影し、地上へ送つてきた。これまで地上の望遠鏡では、月面上の約1kmのものでしか識別できなかつたものが、約1m程のものまで識別されるようになつた。昭和40年になるとアメリカのマリー4号が火星面の写真を送つ

てきた。昭和39年11月に打ち上げられたマリナー4号は約7ヶ月半の飛行ののち、火星から約16,000Kmにまで接近し、22枚の写真を撮影した。これらの写真には月に見られるような大小のクレーターが多数写つており、非常に驚かされると同時に、科学技術の素晴らしさに感嘆させられた。

〔再び火星接近を迎えて〕

このような科学技術の進歩とともに、我々のようなアマチュアは、価値ある観測というものの分野は非常にせまくなつてきているかもしれない。けれども例えばマリナー4号の撮影した写真を同定する際、火星面の地図が完全なものになつていないことが問題になつてゐるごとく、まだまだアマチュアの手にゆだねられている点があるといえる。しかし、このように単に学術的価値を望むだけでなく、古代人が星空をみるとから、文明をつくりあげたごとく、我々もつと天体という悠久の自然に、自由に親しみ、科学する心を養なうことこそ、アマチュア観測者の特権ではないだろうか。天文台開設以来、再び火星の大接近を迎えようとしている。我々研究会員一同、近づく火星を観測するため、今から準備している。

以上天文台開設以来15年の歩みをかけ足でながめてきたが、この間研究会に対して限りないご理解とご協力をいただいた元館長堀芳孝先生、前館長東谷薰先生、現館長伊藤長右エ門先生他博物館職員の方々にこの稿を終えるにあたつて、心から感謝の意を表します。

（昭和42年4月）